五井蘭洲『萬葉集詁』下（翻刻）

北谷幸冊

萬葉集詁　七　八　終

態藝事爲　（内扉題）

以　いはひふし　いは発語。鹿は前足を折てふすものなり。うや〳〵しきをいふことは。鶉も草陰をはひまはる故に、うつらなすいはひもとをりといふ。又いはひふすらめと云を契説に、鹿を射ふせる也、いはひもとをりとは鶉を射て首をもとらし置といへり。前後矛盾せり。まへの説をよしとすへし。

いはかくれます　人死して土石中におさむるなり。

いはねさくみ　契云、岩根のゆかみまはりたるをふみこゆる事かと。

いさり　潜の字を用ひたり。

いきなへて　（一ウ）

いしうら　石占と有。石にて占ふ也。灰占なとのことし。

いつきます　人死して神としまつるなり。

いゑさかり　吾家にとをさかるなり。

いさよひ　いさなふ也。やそとものをゝめしあつめいさよひたまひと有。

いゆきさたくみ　たくみは路崎嶇たるをいふなり。

いたとりよりて　いは発語。手にとりよりてなり。

いたはしけれは　疾病なり。

いたき疵に辛塩そゝく

いむ　斎の字也。かみさひていむと有。又、ゆふかけていみし

（二オ）

やしろとも有。いはひ祭るこゝろ也。是を人を忌きらふにかけてもいへり。

いこしてうえし　梅をおこして吾宿に植たる也。いは発語。

いたみ〳〵　物をおもへはつらくうれふる故なり。

いさなみに　人をいさといさなふなり。

いつかりませは　いは発語也。つかりは袋のくちを鑠のことくぬふを云と契説なり。しからはかゝりの事なり。かゝりてひもを一所によせる也。男女の一所によりあふ也。ひものをのいつかりあひとも、つかりあひは相親しむ也。

いゑて　家出也。僧となるなり。

いもかいはゝは

（二ウ）

いきためかたく　息をためて居かたきなり。

いむれておる　群居なり。

いさりつり　漁釣なり。

いそはくみる　いそはくは、争ふなり。人のいそきあらそふをみるなり。こゝは材木をはこふを見るなり。

いよせたてゝし　いは発語也。倚と竪と也。こゝは弓をよせつたてつなり。

いのねられぬ　不能寝也。

いゆきさくみて　ゆきなやむ也。さくみは崎嶇たる道也。それを直に行なやむに用るなり。

いそはへ　いは発語。そはへは戯なり。

（三オ）

いなもうも　いなはいや也。否也。うは諾也。契云俗にいやおうと云也。

いらなけく　勢のなき也。いさみなきなり。

いきとほる　慍也。

いこきわしらひ　見安云、むつへる心也。季云、師説こきは舟を漕よるなり。いは発語。わしらひは奔をいふ也。奔を妾とすとあれは私に夫婦となるなりといへり。いかゝあらん。

いふかしみ　おほつかなく心もとなき也と、季説。

いみしみ　忌きらふなり。

いさはれ　禁し呵する也。しかりいましめらるゝなり。

いふせし　こゝろもとなきと、季説。いふせくもあるかの哥にては通せす。つらく苦しむこゝろなるへし。

（三ウ）

いきためかたき　息するまもなきなり。

いはひ　ひもとかすいはひてまてとも、君か来ぬとなり。このいはひは後の事を兼ていのりいはふ也。慶の字の心ならす祝のこゝろなり。

はひしてませは　火葬にして灰にするなり。

はふり　魂はふりと有。葬送なり。

はひたもとをり　みとりこのはひたもとをりとあり。はひもつれるなり。

はつ〳〵　事のおほからぬをいふ。稀に人にあふをはつ〳〵にあひみてといふ。

はくゝめ　吾子はくゝめと有。鳥の子を育るより出る詞也。

（四オ）

羽の下に置をくゝむといふ。

はり　すみのえの岸を田にはりと有。墾の字也。田をすきかへす也。

はなしひ　しは助字也。鼻ひる也。くさめ也。こふる人にあはんとては鼻ひる也。又、鼻しはなしひとも。重ねことはにも貧窮の哥に出たることはとあはせ考ふへし。

はつとかり　はしめての鳥猟也。萩を合せよめり。契云、大鷹のとや出したるをはしめてつかひそむる也。小たかかりにはあらす。

はやす　さのゝ茎立おりはやすとあり。賞する也。

にくゝあらは　きらふこゝろ也。にくゝあらは也。

にふゝにみえて　にこ〳〵とわらふなり。

（四ウ）

になひあへぬかも　荷擔を得せぬなり。

にほはさましを　季云、にほふはあそふこゝろ也。あそはしめんとなり。七夕哥にほひにゆかなとある言も遊戯に行んといふ事と。

にゐも　新しき喪也。今死したることくといふこと

はなり。にゐものこともねなきつるかもとつゝく。

ほ　ほころへと　誇り高ふるなり。又、ほこりとも有。鯛つりほこりと有は鯛をおほくつりてほこりよろこふなり。人にひけらかすならん。傲慢とはかはれり。

ほつてのうらへ　ほつては帆手也。帆の綱也。うらへは占なり。手の占といふことある故にかくつゝく、又、うらえをかた

（五オ）

やきとは、昔鹿骨をぬき占ふ事ある故いふ也。やきは焼也。いつれも火にてやきて占ふなり。

ほと〳〵しにき　わらひよろこふ皃也。季云、ほとんと死にきと解り。

ほとけとも　長流云、欲する心也。見安云、ほとめけとも也といふ。さま〳〵とするなり。

反へなりて　隔也。山川を中にへなりてと有。

と　とのゐ　侍宿と書。

とひさくる　問ひ来る也。

とりとゝこほり　衣手にとりとゝこほりと有。もつれ離れぬ也。

とかり　鳥を取猟なり。

（五ウ）

とものそめき　朋友つれ行てさはき楽しむなり。

とのこもり　殿にこもる也。こゝは人の死して窀穸に有をいふ。

ち　ちはひたまひ　祝ひたまひ也。季云、誓ひてなり。

ちつにふし

ちはふ　たまちはう、祝也。たまはほむる詞也。神を尊ひいはふ也。

奴　ぬかつく　頓首也。①

ぬる夜おちす　一夜もかけすあふこと也。

ぬすまはむ　竊食と書。いはすいひしと吾ぬすまはんとあり。言を食ふといふことし。いはぬことをいふと云、いひしことをいはぬといふなり。

を　おもやめつらし　珍らしく對面するなり。

（六オ）

おゝし　雄壮なるなり。

おもひやる　思ふ心をやりすつる也。想像にはあらす。おもひをすこすもおなし。
おかしたまひて　置給ふ也。
おはせる　みむろのや神のおはせるはつせ川と有。帯にせるなり。
おもわすれ　人の面をみわするるなり。
おもかくし　恥る模様なり。
おもふえに　契云、えは縁也と、愚説おもふゆへの暑語ならん。
をつめ　小集楽と書。宴会の楽しひなり。
おりあかし　坐して夜をあかす也。こよひはのまんと有。時鳥に、こよひはなけといのるこゝろか。
（六ウ）
おくりまをして　送り申て也。契云、古今集のはせを拾遺集のこをはいの類也。愚案、契沖かな遣ひにくゝられてかくいふ也。はせをこをはいと書か正なり。言葉にいふことくかけとならは此とほり也。うの字にては言とちかふなり。
おもひたはみて　こゝろの屈するなり。
おもやはみえん　面影のみえんなり。
おもへりしくし　契云、日本紀に色の字をおもふとよめり、おもひのいろに出る也。しくしは助語なり。
をのかむき〳〵　をのか様〳〵といふことし。人〳〵のむかひゆくさまなり。
をやしときは　常なり。
（七オ）
おもふそら　なけくそらとも有。
おほみこと　天子の勅言なり。
おほのひ　寛なることなり。
おるらくの　おくかもしらすと有。居也。おくかはおく所なり。
をしねり　やき太刀のたかひおしねりと有。太刀を押ひねりなり。又、おしにきるとも。
おとつれ　音便也。凡の義と別なるか。
おくてなる　人倫門に出。
わかゆきは　吾行は也。旅行をいふ。
わきはさむ　児とつゝく。

和

わかへましけり　人のとしよらす若くみゆるをいふ。

（七ウ）

わかゝへり　弱反と書。又、わかゆとも有。石綱のわかゝへりと有。

わさとつくれる　吾職業としてつくる也。

わらはことする　老人の童子のことくなるをいふ。

われしく　吾も〳〵俗のわれめかす也。

わかせんひろをみもひともかも

われくれと

わひしみせんと　只わふる也。

われて　水の岩にふれてわれてそおもふと有。季云われては、わりなくてといふ。愚案、わかれての中暑なり。岩にふれて水のふたつにわかるゝを吾さへらるゝ事ありてわかれたるにたとへていへるならんか。われてを

（八オ）

わりなくてとはみかたし。

かゝい　ゆふなきにかゝいの音きこゆと有。擢合と書。見安云、舟人の棹哥の声なり。

かゆきかくゆき　彼往此去と書。

かきはきて　塵を掃除する也。

かたちつくほり

かきわたり　いかきわたりと有。いは発語也。かいにて水をかきてわたるなり。

かきかそふ　かきは助詞、かそゆる也。

かゝうかゝひ　かゝうは、今云かけ合也。かゝいは本注に嬥歌と書て、東俗語曰賀我比と有。しからは、哥を人〳〵

（八ウ）

かけ合にうたふ事也。契沖・季吟共にいやしき哥の曲也と。

かすかく　水の上にかくかく（ママ）と有。

かたまりをる　かゝまり居る也。蟹にていへり。

かたまけて　物の両方そろはぬ也。一方はかりまうけたる也。ゆふかたまけてと有は、晩にかたまちする也。晩に恋のこゝろます故なり。又、またもあひみん秋かたまけてと有。秋をまつこゝ

ろ也。時をまちまうくる也。いまたいたらぬ故
片といへり。
かりそけ　むはらかりそけと有。苅除く也。
かへりにたにも　うち行立かへりになりともゆかん
と也。
かへるまの　かへる時の間なり
（九オ）
かつらくは　かつらにすらくは、柳を折て也。
かゝふり　蒙り也。御言かゝふりと有。
かなるましつみ　鹿の鳴く間猟者の静まりてゐる
也。
かくさう　隠し障ゆる也。こゝには浪にて藻をかく
す也。
かへさまに　今云かへさま也。却てといふこゝろ也。
かまけ　負也。かは発語也。今東国に事おほきにくゝ
らるゝをかまけといふ。
かたらひ草　俗にいふはなしのたね也。萬世のかた
らひ草と有。
からまる　君とつゝく。男女相なるゝ也。纏綿也。

与

かとあらぬ　髭かきなてゝと有。仙云、かとはよし
といふこと也。よくもなきと云事也といへり。
愚案上のしの字を取て
（九ウ）
しかとあらぬにてはなきか。
かれ　衣手かれて独ねんかもと有。離也。ひとつに
寝し人のかへりて吾ひとりねんと也。
かきつらね　季云、かいつらぬる也。夫婦うちつれ
て也。
かゝたぬ　人をかこたぬなり。
かたはむ　人かたはんかもと有。季云、かとはかす
也。しかれは人のぬすみとる也。
よこもり　よくこもる也。猪とつゝく。猪はふしと
をよくこんもりとつくる故なり。
よこす　讒の字也。人言のよこすを聞てとあり。
よすか　身をよするすみかなり。
（一〇オ）
よはひ　人の国によはひ行てと有。結婚と書。
よたち　徭彼と書。えたちの事なり。

よしをなみ　風流の二字よしとよめり。常に用る由の字の心ならす。畢竟みことになきをいふ。

よなき　みとりこのよなきと有。嬰児夜啼也。

よけくをみれば　よくみれはなり。

よこと　横さまの言也。かきほなす人のよこゝとゝ有。

よそり　恐れ也。又、外へよる也。わき道をせす来るをよそりなく通ふといへり。

たけはぬれ　たけは手にたくる也。ぬれは髪の濡てすへ〳〵とする也。たかねはいもかなかき髪と有。仙云、ぬれはまとはるゝ也。

（一〇ウ）

太

たけは、あくるなり。

たてまたす　君に仕ふる也。

たむけ　地理門に委し。

たまつさのことくにつけす　ふみをもおこさぬ也。

たつきをしらに　たよる方をしらぬなり。しらにはしらすなり。わつきもしらすと有心おなし。

たゝか　君かたゝかと有。まさかと同し。君かことをありのまゝにいふとなり。不詳。季云、君かありさまなり。

たかねて　こしにたかねてと有。又、手束杖たかねてとあり。つかねて也と、愚案つかへてならん、杖をつきはるなり。

たゝはてに　直に舟のとまりつくなり。

（一一オ）

たちあさり　立挙り也。又、たちをとりとも有。

たゝこえのこのみち　ますくにこゆる道也。山路也。

たまとをり　又、たもとをりとも。徘徊也。たちもとをりなり。

たなしらす　契云、たなは軽の字を用ゆ、身もたなしらすと有。身命をかろんして君に仕ふるこゝろ也。身をたなしりてとも、又、身ある事をもしらす女子にまとふも同し事也。

たつさいて　人々につれ立行也。たつさはりとも有。

たかいをしねり

たと〳〵し　たとる也。覚束なき也。たつ〳〵しとも。たとるは手に物をとりゆくなり。

たまあへは　たまは心也。人と吾とこゝろのよくかなふ也。

（一一ウ）

又、むつたまあへやとも有。

たか〳〵に　来んと有。

たゝま　謀なり。

たちのいそき　旅立のいそき也。水鳥のたちのさはきともあり。水鳥の水よりたつはさはかしきもの故なり。又、さき守のたゝんさはきとも有。

たちしなふ　立る容のしなかやなるなり。

たはゝさ　戯の態なり。

たつる　みつきと有。奉るなり。

たかてらす　吾日の本、又、吾日のみことつゝく。天下に臨御し給ふなり。

（一二オ）

たてまたす　遣使と書。

たゆたふ　ためらふ也。猶豫と書。

たはやめのまとひ　女色の迷ひなり。

たゝ　たゝにみわたすとあり。直になり。

たはことゝかも　妄語也。戯言なり。

たゝさにもかにもよこさも　たつにもよこにもいかさまにも也。かにもを中へ入たるなり。

たゝ目にみけん　直視なり。

たつらくの　たつきもしらすと有。立なり。

たきそなへ　契云、かすをかそふる也。たきは書あつむるなり。草花を多く植るをいふなり。手寸十名相と有。季説には

（一二ウ）

童蒙抄を引て、手もすまと有。さは讀かたし。たきそなへは仙点なり。仙説は、分明ならす。

曽

そくる　かりそくると有。草を苅除る也。

つ

つまひく　梓弓つまひくと有。つまはつまをとる也。弦と矢を指にてつまむ故也。季云、弦打のこゝろ也と云是なり。

つまつく　うか〳〵ありきてつまつくと有。

つかみかゝる　いつこの恋そつかみかゝると有。人にとりつく也。こひのやつこのつかみかゝりても。

つまわかれ　妻別るゝなり。
つてこと　傳言なり。
つゝむ　あまつゝみ也。雨をつゝしむと契沖いふ。
愚案には雨を

（一三オ）

ふせくことか。
つゝまはす　とゝこほらぬ也。見案云、無恙也。
つけなへて　かくさす告るなり。
つれもなき　つれなき也。こゝろつよきなり。
つくをり　形つくをりと有。形のくつをれをとろふる也。
祢
ねとりする　ねとりと有。笛の曲也。又、うそふく声をたとへて云。
ねのみやなかん　あしすりのねのみやなかん。
ねらひ　さつをのねらひと有。鹿をねらひ射る也。うかねらひとも有。うかゝひねらひなり。
奈
なこす　和らくる也。ちはやふる神をなこすとあり。
なつみくる　雪消の道をなつみ来ると有。しのき来るなり。

（一三ウ）

なひき寝　人と共にいねたるなり。
なかきけ　長息の歎也。此詞になけくとほむる詞との二義あり。
なつさひ行　馴れ行也。さそふ心也。鳥の群てゆくにいふ也。又、なすさひわたりと有。たつさへて行なり。又、なつさふとも。
なゝかしそね　泣ことなかれなり。
なり　産業也。稼穡也。なりわひとも。
なかこと　間言也。人のなかこときけるかもと有。二人の間のことをあしさまにいふなり。
なみしおもはゝ　人並におもふなり。

（一四オ）

なつむ　苦しむ也。煩の字をよめり、又、とゝこふる心にもきこゆ。
なわひ　わふる事なかれ也。うれふるなと也。
なつかしみ　せよとつゝく。垂眷愛と云心也。
なつけにし　馴れしたしむ也。
なくる　慰むる也。あそひなくると有。

なそへ　つゝみんとつゝく。なそらへてみんと也。
なふる　大宮人はいまもかも人なふりのみこのみたるらんといへり。女子を男のたはふれいとむ事也。すへていはく今の人のいひなふるこゝろなるへし。
武　むけ　たいらくと有。平也。重ね詞也。敵をうち平くるなり。
（一四ウ）
宇　うちなひき　いもねられすとつゝく。打解てのこゝろ也。又、こやしぬれと有。へつたりと打臥也。又、やとる旅人ともつゝく。路にくたひれたる事とみえたり。
うらなけをれは　心中になけきおるなり。
うらふれくらし　葉のしほれてたれたるをいふことは也。これを人のおもひになつみたるによせていふなり。
うつし　凡ものゝ色をおろしうつす也。水をもてすれは露をもみちのうつし。
うかねらひ　うかゝひねらふ也。
うつたをり　妹かてをとりて引よちうつたをりと有。
うからふ　窺ふなり。
（一五オ）
うそむき　うそは虚也。むきは吹也。口をむなしくふきいたす息なり。
うまいもねすて　不熟睡也。うまくもねすしてなり。
うけひ　いのるなり。又、誓ひともみるへし。呪なり。
うなける　うなかせると同し。飾るこゝろ也。
うらさひくらし　心さひしく也。又、うらかなしとも。
うはへなき　実情までもなし。うはへ、おもてむきの心もなきなり。
うつてゝは　打すてゝなり。
うれたきや　なけかはしきなり。
うつろはうき　萩の花のうつろふをおしみて憂しと
（一五ウ）
いふなり。

うらもなく　いにし君と受たり。②

うへ〳〵な　諾の字を用ゆ。けにも〳〵といふこゝろ也。

うちはめて　吾身其事にうちこんてなり。

うはふ　奪也。雪の色をうはひて咲る梅の花とあり。

うらまけて　うらは心なり。まけては設けて也。こゝろに思ひまうけてなり。

うへはなさかり　うへは表の字を用。外也。なさかりは遠さかるな也。寝とこより外へのり出るなといふ也。

うらさして　母はとふとも其名はいはしとあり。季云、今いふうらとふて見ると云ことのことし。

（一六オ）

うたこつ　わかせと有。哥うたふ也。海中にてやる方なく哥うたひなくさむ也。季云、ひとりこつと云詞のことし。

うましもの　よろこふへき物を見て、すへてうましものと云。橘をさしてもいへり。

のみ　神にこひのみと有。のみは祈る也。

及

のる　名はのるてしをと有。我名をいふ也。今名のるといふか如し。

のれ　いふ也。又、罵をもいふ。

のませる　酒を飲む也。令飲と書たれと飲しむるといふにあらす、只のむなり。

のまん　おりあかしこよひはのまんと有。郭公を待哥なり。のまんはいのる也。鳴声きかんといのる也と季云。

（一六ウ）

久

くもゝ（ママ）おちす　隈々のこさぬ也。

くに見　登高して眺望するなり。

くちやます　おもふ事を得いひやまぬ也。

くりたゝみ　たくりよせたゝみよする也。道のなはてをくりたゝみと有。道をたくりてたゝみよせんと也。縮地といふことし。

くそとをくまれ　大便を遠方へ行てせよ也。まれは、便するをいふ。

くすり猟　五月のほとのくすり猟と有。見安云、夏の鹿狩なりと云。きそひかりも用し。

くれしおもひ　欝の字を用ゆ。其心也。こゝろのはつ

（一七オ）

きりとせぬなり。

くれ〳〵　はる〳〵のこゝろ也。

くすしみ　くるしき也。あやにくすしみと有。

くれしおもひ　かきくらしおもふ也。心もくもりあきらかならぬなり。

くもかくれ　雲隠と書。人死するを日月なとに比して其よせを以て雲かくれといふはさも有へし。

大津皇子臨終の哥に、

百つたふいはれの池になく鴨を今日のみ見てや雲かくれぬる

是等は何のよせもなし。元来雲かくれは隈かくれなり。日本紀にやそくまちにかくれんとある詞よりおこりて

（一七ウ）

土中にかくるゝ也。隈は土也。山に葬れは山かくれ、洲に葬れはしまかくれ、石中にほほむれは岩かくれといふ。

や　山かくれ　人の死也。山に葬る也。

やまはゝすへな　病はせんすへなきと也。

やさかのなけき　八尺の歎と有。なけきの多きなり。杖たらぬやさかのなけきとは、八尺は丈にたらぬなり。

やさしみ　恥かしき也。君をやさしみと有。君を恥るなり。

末

まくはし　くはしく見る也。

まうらかなし　真に心悲しき也。

まつろはぬ　不順なり。

まねくゆかは　間無く行なり。

（一八オ）

まちつけ　待つゝくなり。

まゆ根をいたつらにかく　又、まゆかゆみと有。こふる人にあはんとて眉のかゆきなり。

またす　人にをくるもの也。遣の字を用ゆ。

まいはせん　人に財宝を送るなり。

まろ寝　ひとりいぬる也。紐をとかぬゆへかくいふ。

まつりたす　奉り出す也。

まけのまく〳〵　大王のまけのまく〳〵と有。まけは任地。まく〳〵は、まに〳〵也。大君の臣下に任するに随ひて職をつとむる也。

まきたまふ　任也。君より任したまふなり。

（一八ウ）

まきをゝし　草木のたねをまきてはやす也。

まゆすひ　まむすひの事也。死結をいふ。

まきて　岩ねしまきて死なましと有。まきてはまくらにして也。枕といふもまくこゝろ也。

まかことかさかさまことか　狂言逆語也。わかきゝつるまかことゝ有。仙云、まかれるよし也。よのつねに人のいまふことをまか〳〵しといふ是也といへり。

まかひ　交る也。もみちのちりのまかひと有。

またせは　君にまたせはと有。衣を君におくらはといふこゝろ也。またすは奉の字を用ゆ。又、遣の字をもよむへし。

まさか　君かまさかを人の告つると也。季云、ありさまと

（一九オ）

いふ心にていつ方にも通すと也。

まつかへり　しゐにてあれかもと有。仙云、またれてかへることたゆたひてあるかもと也。此解聞えす。愚案に、此哥は鷹のそれたる時の哥なり。鷹をまつもかへるといふも皆誣言にてあれかし実に無き事にせまほしきと云こゝろか。

まいる　入り来る也。なつみまいると有。まいいりとありて朝参と書。朝廷に出仕也。まいゝりの君かすかたとあり。出仕の体也。吾はまいこんともあり、参り来んとなり。

けけなかき　歎息するなり。長大息のこゝろ。

けけや　こゝろもけやにおもふと有。心のきや〳〵とするなり。

（一九ウ）

不ふりたるきみ　季云、久しく中絶たる人をいふと有。しかるに振の字を用ゆ。吾をふりすてたる人といふことならん。

ふきなす　吹鳴らすなり。
ふりさけ　頭をあけてのそむ也。さけは遠き也。ふりさけて三か月みれはと有。
ふたゆく　うつせみの世やふたゆくと有。再往也。死してふたゝひ此世に行やと也。又、あふ夜あはぬ夜ふたゆくならんとも有。一筋ならぬによりて也。季云、ふた行の詞をよませと讀、古点なるよし也。
ふねたき　やふねたきと有。浪風のあやうきを舟にて凌く也。いくたひもある故八たひといふなり。
（二〇オ）
ふしこえ　伏超従と書。ゆかまし物とつゝく。
ふさへしに　おさへなり。一国の鎮、まもり也。国の守の役也。
ふさたおり　ふさはおほき也。多くたおる也。又、ふさすとも有。稲の穂の多をふさなりといふ。
己
ことはかり　よくせよと有。思慮計較也。
こち　かよひ来ねと有。乞の字を用ゆ。我方へ来れとねかふなり。
こやしぬれ　こやは臥也。ふしぬれはと云心也。
こゝろくしめくしもなし　心目ともにいやになき也。愛する心なり。
こひしけは　恋のしけきなり。
ことゝひ　言疾く也。はやくいひかはす也。
（二〇ウ）
ことさけは　わさ〳〵と人をさくるなり。
こひくさ　草にあらす、只恋の事也。
ことなくは　あふことのなきを琴にかけていへり。
ことたく　こちたくとも有。世の人の言のおほき也。
ことのなくさ　俗にいふ口なくさみ也。人をなくさむるまてにおもふなとゝいふまて也。
ことうえく　百済とつゝく。くたらの人は言語通せぬによりて、うえくといふ。契云、さえくなり。これらの説皆々今のうなるといふこゝろ也。
こほしき　恋しきなり。
ことさへく　言ひさはくなり。
（二一オ）
ころふせは　ころひふす也。轉臥なり。

こゝろふりおこし　ますらおのこゝろふりおこしと有。こゝろをきつとはけます也。

ことむけ　帰服せしむる也。ちはやふる神をことむけ。

こきこな　契云、乞の字をこと讀り。萬葉集中乞をいてとよむ事多し。これもこきいてなといふこゝろかと云。

こゝろすゝむな　心にいそく事なかれ也。こゝろくきとも、又、くみとも。

こひまろひ　契云、こひはこやしとも云。臥也。ふしまろひ也。

ことてしは　言ひはしめたる也。

こゝろくゝ　契云、くゝは含也。こゝろにふくみおもふ也。こゝろくしとも。

（二一ウ）

こきのすゝみ　大舟のこきのすゝみ。進みこく也。

こちたみ　人の言にくるしむ也。人ことをしけみこちたみとあり。

こゝろゆも　心つよくもなり。

こゝろなく　心慰なり。

こき　梅花を袖にこき入ると有。

ことのをのへす　言に得いひのへぬ也。口より言のいつるにて緒といふ。緒よりのへるといふ詞成。

ことはたなゆひ　言のかろき也。たなは軽の字を用、契沖説也。

こちふり　うちふり也。うちは策なり、策を打ふるなり。

ことはさけみさくる　契云、ことはさけはかたりさけと讀へし。

（二二オ）

ともにかたりともにあひ見て愁をさくる也。こゝは田舎故其人なしと也。

こもにしは　篭りしは也。

ことゝ　事迹と書。国の守にていはゝ其政績也。

こつみ　こすとつゝく。人の集りこぬことに見安に解り。

こゝろたらひに　心のまゝ也。こゝろに足るなり。

こきはてん　舟を漕ゆきてとまらんと也。

こゝろあること　あたし心也。但萬葉集内にある哥にて也。

ことたまのたすくる国　見安云、ことたまは詞也と。此心なれはたゝことはにあらす祝詞の事と聞ゆる也。鬼神門に別の説あり、合せ考ふへし。又説に来年の吉凶を見ん

（二二ウ）

とて岡にのぼりて吾家をみるにことたまを詠り。この時は吉凶をことたまといふかことし。

江

えまひふるまひ　笑語起坐をいふ。又、えまひまゆひきとも有。

えたす　課役なり。徭役也。えたすはたらはと有。課役を多くはたりとる也。

えにかきとらん　画に書とらん也。人のすかたをうつすなり。

天

てふり　都のてふりと有。都人の風もやう也。是より言にも通して云。契沖夷曲をもて注するは分明ならす。

てもすまに　すまには隙なき也。手の隙なくつはなをぬくと也。又、うえし萩ともつゝけり。

てにすへ　鷹を手にすゆるなり。

（二三オ）

てを折て　指を折てかそふる也。

てらさひあるけと　人にひけらかしありく也。針袋をさける事にていふ。

あ

あちさはふ　季云、甘をあまき辛をからきとしるは誠なれは、まことゝいふまくらことは也、といへり。見安云、あちはふるにて、さは助字ならん。又、夜昼とつゝく。爰の季注云、よきことにいふことはなり。よと受て夜昼といふ也。又、目にはあけともとあり、季云、目に味はふ也。しかれは、目に見あくなり。

あへきつゝ　喘声。

あてかをし　あてかはし也。擬の字也。あてゝ見るといふ也。すみなはをあてるなり。

（二三ウ）

あしすり　足をするなり。

あきしこり　あきは商也。しこりはしきり也。商賣

をしきりにする也。又、あきかはりと有。賣買して半に変改するなり。
あないきつかし　患へ気つかはしきなり。
あえる　饗也。宴なり。
あせかき　なけきねとりするうそむきのほりおのうへを。山にのほるに汗をかき笛ふくことく息をふき出すなり。
あらかへは　争へはなり。
あしうら　足をもて吉凶を占なふなり。
あかう　命はいもかためと有。贖なり。
あむさん　湯をあひせんなり。

（二四オ）

あはすまにして　不逢して也。こりすまなとの類也。
あそふさかり　遊楽の最中なり。
あひしえみて　相笑語也。とも〳〵に楽飲する也。
あてさはす　契云、わつらはさすといふこゝろか、民を累はさぬ也。季注同し。
あとりかまけり　国めくるあとりかまけりと有。
ありかてまし　在かねまし也。吾身こゝに得をるましき也。
あふさはに　逢ことのおほき也。古注也。契云、大方と同し。おほなはともありといへり。
あたらし　惜むへきなり。
ありなみ　一所にありならふ也。

（二四ウ）

あくまてに　心にあきたるまて也。
あめしられん　人の死するをいふ。魂の天にのほれは、天にしらるゝなり。
あふりほす　雨にぬれたる衣をあふりほす也。火を以てほす也。
あもりまし　天神の下り坐ますなり。
あひき　③
あひたはけ　④
あともひ　皇軍をあともひたまひと有。いさなふ心也。誘の字也。季云、あつむ也と。又、たてゝともつゝく。季云、今はた思ひたちてなり。又、てとなかりも有。跡思と書。いにしへをおもふならん。愚案には、ともなふへきか。あは発語

也。ともなふの畧成へし。契云、誘

（二五オ）

のこゝろもこもれり、あともへかへるとある。

季注は、哀れとおもへといへり。哥を通て解をなすなり。

あさり　島廻とも書。求食とも、朝入とも書。季云、朝すなとりするをあさりと云と、此説いかゝあらん。求食と書たるあさりは鶴にていへは鳥の食を求る也。其他のあさりは別議あらん。萬葉才七、

黒牛の海紅匂ふもゝしきの大宮人しあさりすらしも

なとあるは、たゝ海邊にあそふ事とみえたり。朝入りと書り。又、やまのへにあさる薩男と有。童蒙抄云、あさるは狩也と。これによれは魚にても禽獣にても取る事をあさるといふ也。射去と書。仙点はいゆく也。又、十八巻に、

（二五ウ）

ふち浪をかりほにつくりあさりする人とはしらに海人とか見らん

とあれは、此あさりは遊行の事也。尤湾廻とかけり。

左

さもらへと　侍へるとなり。

さかしらす　かしこたてをする也。又、さし出かましきともみるへし。

さひつゝをらん　淋しくおらんなり。

さとれさはかり　長流云、人の心にかはりて神の能さとり給へと也。分明ならす。

さけひをらひ　さけひおめくなり。

さねかには　いぬるからはといふ心。さは発語、ねは寝なり。

さかみつき　酒宴也。あそひなくさむとつゝく。

（二六オ）

さはえなすさはく　五月の蠅のことくおほくさはくなり。

さやき　さはく也。戦也。

さわたる　さは助字也。月の雲間を行をいへり。愚案さはやきなり。雲間の月は早く行ことし。

さね　わすられすと有。さねは実也。まことにわすられぬなり。草木の種の中に根となるへきちひさきもの有。是をさねといふ。小根也。これか根本となりて草木の芽は生する也。人のまことのこゝろは人の根本ゆへ人にていへはまこと也。故に、中庸に誠物之終始不誠無物とみえたり、ありかたき事也。

さしまくる　指向ふなり。

（二六ウ）

さやり　礙り。さゝえらるゝなり。

さよとふわかせ　夜中に来りとふ吾夫なり。

さた　ことそさたおほきと有。さたは人の言也。今いふ沙汰の俗言は是よりいつるか。さたの訓いかゝならん。未考。愚案、貞浦の此さたすきて後こひんかもと有、さたはさは也。言ひさはくる里人のいひさはく事のやみて後にこひんかと也。季云、師説にさたは甚也といへり。通せす。見安云、人に沙汰せらるるといへり。沙汰の字をあつるはいかゝ、沙汰はえらむ也。さたすきてを季説に央過なり年の半過て老しなり、といへり。

（二七オ）

幾

きそへとも　衣を著襲ふなり。

きるみなみ　錦繡ありて著る人のなき也。

きかみたけひ　牙をかみたけりいかる也。

きそひ猟　くすり狩の事也。四五月の間にするなり。

きゝのかしこく　耳におそれきくなり。

きほひて　雪にきほひて梅の花さく也。あらそふ也。

由

まけしとはりあふなり。

ゆくさくさ　往来也。又、ゆくさもくさもと有。

ゆうけとひ　夕衢占問と書。ゆふへのつしうらなり。

又、あしうらともつゝく。

ゆくさ　行さき也。又一説、ゆくさまなり。

ゆきあひ　道にて両方より行あふなり。

（二七ウ）

ゆめのあひ　夢に人にあふなり。

ゆきちう　行といふ也。ゆきちう人とつゝく。

ゆめのわた　ことにしありけりとつゝく。

ゆふとりして　契云、してゝは鎮する也。神の慮をなくさめしつむるなり。それをすくにゆふの名のことくにもすと也。愚案、してゝはしけき心ならんか。

ゆきふり　道行ふりと有。道を行折から也。

ゆゝしく　おそれいむへきといふ心也。いみはゝかる也。

ゆるうときなく　ゆるす時なく也。おこたらぬなり。

ゆり　哥を謡ふ時声のゆる也。百合にいひかけたり。

ゆかしみ　情欝悒と書。心のうつとうしきなり。

（二八オ）

ゆきのすゝみ　ますらおのゆきのすゝみと有。男子の勇壮をいふ。ゆきは靭をいひかけたり。

ゆきとりさくり　泣子なすゆきとりさくりと有。泣子の人にとりつくならん。季云、ゆきを靭といふは誤ならん。

女

めかれす　絶すみるなり。

めさす　召上るなり。

めくしも見るな　みくるしと見るなといふ心也。無禮とみるな也。季云、あやしくもみるななりと。

めをほり　見んことを欲する也。人をこふるに云。鹿を欲するにもいへり。

めすらめや　呼召なり。

（二八ウ）

めならはす　人の目おほきをめならふと云。しかれは是は、吾ひとりのこと也。又、あしき絹を買たるなれは目きゝを得せぬことか。みる事に習ひのなきならん。

めくまんと　愛する也。恵得と書たる故、季云よしえやしと一本に讀るを善といへり。又、めくゝや君かと有。愍の字を用ゆ。めつる也。恵の心にあらす。

美

めかりしほやき　草木部に出。

みことかしのみ　すへらきのみことかしこみと有。天子の命をつゝしむなり。

みおもひ　さきの人の思ひをおもんする詞也。

みたまたまひて　みたまは、御賓也。たまものをたまふなり。

（二九オ）

御恩を下したまはり也。

みゆき　君と時〳〵みゆきしてあそふと有。これは人磨明日香皇女をいたむ哥也。みゆきは、天子にかきらぬことはとみえたり。

宮にゆく　宮仕に行なり。

みかほし　山もみかほしと有。見まくほしき也。一云、山のしけりたる也。

みかさらん　身をかさりけさうする也。女子にて云。

みのり　御法也。官禁也。法令なり。

みなうら　水占也。石占、足占なと也。水にて心の占をする也。

みやて　官府に出て仕ふる也。しりふりとつゝく。しりふりは

（二九ウ）

官府の事を能しるなり。

みくさ　すへらみくさと有。皇軍也。くさは、軍營也。

みたちせし　御立也。貴人のたち給ふ所也。

みけ　御食と書。食する也。仙点にめして也と有。

みかてり　山の上のみ井をみかてり　又、穂むきみかてりと有。見かてら也。檢税使なとの稲の出来を見てから也。

みつれにみつれ　身のつかるゝ也。契云、日本紀贏の字をみつれとよめり。季云、みたれ也、みたれ思ふ也。又、おくらんいもはみつれてもあるかと有。吾を思ひやつれてもあるかなり。季云、此説分明ならす、師説とてみえるにてもあらんか也といふ、誤れり。

（三〇オ）

みたま　まへに注す。

しきます　天下を治むる也。

しこりこめやも　人のしきりに来れやと也。

しまかくれ　人の死して嶋上に埋むをいへり。

しはふれつくれ　地にふしてといふこゝろ也。つくれは、告る也。

しゐにてあれや　又、まつかへりしゐにてあれやと有。

之

しみにし心　馴染たるこゝろ也。
しひ言と　人にしゐすゝむる言也。
しゐてはまうせ　契云、しゐやはまうす也。いをてとよめるは旧点の誤り也。移をやとよめる事おほし。こゝは、いをやとよむへし。

（三〇ウ）

しなゝとおもふ　死なんとおもふ心也。
したうれしけん　心中にうれしくおもふなり。
しふ　しは〳〵しふと有。強るこゝろ也。
しこ　ほとゝきすと有。しかることはなり。みたくもなきといふ俗言なり。
しめゆう　季云、領し置こゝろ也。
しはふかひ　しはふき也。せきはらひ也。しはふれつくれと有。鷹のそれたるをめいわくしてせきはらひはかりするなり。
した夜の恋　色に出す下に夜おもふ恋也。
しなひ　私はきのしないと有。たをやかにしなひたるなり。女子の上へかけて、やさしく見ゆるなり。

（三一オ）

しくひあひ　季云、男女のしくみあへるなり。
しなへ　君にこひしなへうらふれと有。しなひとおなし文字にていはゝ萎の字也。やはらかにへた〳〵としたる事也。君をこひて形のくたひれてちからなき也。ちからなき白と注するか、とこへも通してよし。諸説言葉の根本をせんきせす其所によりて注するゆへ不通の所あるなり。
ひつちなく　土をうちたゝひて泣也。契云、泪にぬるゝなり。
ひけかきなてゝ　鬚掻撫也。此句の哥、上二三句ともに通せす。
ひとときさけて　衣のひもをむすふ間もなき也。又、ひもの緒ときといふは、こゝろをゆるすことなり。

（三一ウ）

ひりひてゆかな　玉を拾ひてゆかんなり。
ひきのまに〳〵　ますらおのひきのまに〳〵と有。婦人の夫に従ふなり。ひきはひきゆる也。

ひもときまけて　ひもときてまうけまてなり。
ひともねの　季云、人の思ひの根といふ事かといへり。いかゝあらん。ひとりねの誤りなるか。
ひゝしひしにし　季云、上のひは鼻の字なれは、はなと讀てはなひる事といへり。しからははなひしとよみて、下のひしは衍文なるか。
ひりひとり　いもにやらんとひりひとり袖にはいれとゝあり。反哥に、白玉ひりへれと有。ひろへれと也。拾ひ取也。

（三二オ）

毛

もえす　心はもえすと有。こゝろのもたゆる也。
もなくゆかん　もは喪の字を用ゆ。わさはひをいふ。悉なく行也。人の死するもわさはひなる故に、もといふ。
もゝひしなへて　思ひなへて也。
もたもあらん　黙する也。ものいはすあらん。無事なるをいふ。
もたえあらす　黙不也。いはすしてあらす也。又、もたあらしとあり。かくのみにてはやましといふこゝろ也。
もころを　同しさまなるをいふと也。分明ならす。
せてう　ゐてこす水のせてうと有。季云、せは諸の字也。川浪の瀬と受て心得たりといへとも、とかくにあはぬと也。せといふにもなり。

（三二ウ）

世

すへをしらす
すなとれる　もふしつか鮒と有。
すゝろひて　うちすゝろひてと有。すゝり飲む也。
すたく　集る也。鳥はすたくと有。
すゝしきをい　進み競ひ争ふ也。
すりなく　静なる心もなく也。こゝろの落つかぬなり。
すえのたねから　季云、末を先と見て先世の宿業ゆへといへり、いかゝあらん。見安云、こゝろのたねからといへるもいふかし。

（三三オ）

虚詞助辭

以

いさ　縦の字を用ひたり。縦然の心なれはたとひと同し。契云、是をいさと讀は誤也。よしと讀へしといへり。必しもしからす。いさといひて、よしの心になる也。尤此いさは、さの字　にこるへからす。又、不知のこゝろにあらす。さをにこれは誘ふ也。不知の心あるは如何也。かとさと通すれはなり。

いさ　こよひの雪にいさぬれなあけんあしたにけなはおしけん。このいさは率也。人をさそふ也。

いまた　未なり。

いつも〳〵　契云、こゝはいつ也ともといふ心。よのつねの心に非す。

（三三ウ）

いましはと　今はとての心也。又、今しはしとも有。

いふかし　不審也。又、別の心のいふかし有。欝々とし不楽のこゝろに用。

いて　乞ふ心也。又、発語のことは。

いとのきて　最ぬきん出て也。又、毛なとのぬけたるをもいへり。又、いとゝの心にも用。己上契注也。季云、いとゝしく也。

いさゝめ　いさゝか也。又、かりそめと云にも通すと契云。

いちしろく　色のはつきりと白き也。

いくたもあらす　いくたひもあらぬ也。まもなき也。

いつき〳〵　つき〳〵也。相續不絶也。いは発語。

いさとをきこす　わかなはつけなとつゝく。契説不分明也。

（三四オ）

いなをかも　いな、さにはあらぬかなり。

いかにせる　如何なるといふことは也。

いたみ　甚也。あゆみをいたみと有。あゆは東風也。東風のはなはたしきなり。

いやしけれと　雨にぬれていやしけれと也。しほたれむさき心。

いさなみ　率の字を用ゆ。季云、すみやか也。

いはみて　満〻ておほき也。

はしきやし　又、はしけやし、又、はしけよし、皆同し。諸説おほし。はつきりと見事といふにて者

大概通すへきか。愛の字を用ゆ。愛しめつる也。契云、はしきよし也と。しかれは哥によりてうるはしきとも、みこととも、愛するとも、

（三四ウ）

めつるとも、心を取へきか。日本紀の釈には端清と書て褒美のことはと有。

はしきやしまちかき里を雲ゐにや恋つゝをらん
月もへなくに

此季注、喜撰式に女をいふと俊頼髄脳、倚語抄、奥義抄等此説を用。袖中抄に、物をよしとほむることは也。皆哥によるへしといへり。

又、はしきこと有。女をほめていへり。

はしきやし誰すへてかも玉桙の道わすられてきみか来まさぬ

あすか川萬代までにはしきやし吾大君のかたみはこゝに

石はしるたるみの水のはしきやし君か恋ふらく吾心から

はしきやしかくのみからにしたひこしいもか心のすへもすへなさ

（三五オ）

はしきやししかある恋にもありしかも君にをくれて恋しき思へは

はしきやし翁の哥におゝをしきこゝののこをやかまけてをらん

はしきよし吾家のけもゝもとしけく花のみ咲てならさらめかも

はしけやし家をはなれて

此季注、よしとほむる詞也。王命にて家を離れ新羅に行をほむる心にや。一説、はしけくと同し。日本紀私記に哀といふ語と。

右此哥等にて見れは、うるはしきはさきの物についていふ也。愛の字の心なれは、吾こゝろに愛するものなり。

又、はしきとはかりも、

昔こそ餘所にも見しかわきもこかおきつきと思へははしきさほ山

（三五ウ）

玉松かえははしきかも

此注にうるはしき也。愛の字を用ゆ。

又、季注に袖中抄を引て、萬葉抄帝のもとへ来るをいふ也と。今案するに、是は朝来と書てはしきよしとよみたれはいふなめり。

はしき　右に注す。

はしこやし　本文よしえやしとよみ、文字は級子八師と書。契云、是はよしえやしとよめとも誤なりといひて、はしこやしの解はなし。

はし　あらそふはし也。間の字を用ゆ。争ふ間になり。

はし　はしたといふ心也。人に交はらす独居るは人に對せす

（三六オ）

はしたになる也。

はた　将也。はたやこよひも。

はなやかに　紫の綵の蔓のはなやかにと有。

はろ〳〵　遙〻なり。

はらゝ　はなれ〳〵也。舟のあちこちうかめるを、はらゝにうきてといふ。俗に、はらりといふ。

二　にほす　にほはす也。香をあらしむる也。

にきひにし　契云、和する心也。家ともつゝく。すみなれし家にてと云。季説、饒はひし也と。

本　ほの　朝きりのほのとつゝく。霧にて物の見えかたき也。ほのかにおほろなるこゝろ也。

（三六ウ）

ほと〳〵しけに　殆の字を用。又、ほと〳〵とはかりも。

ほとろ〳〵　はたら〳〵と同し。はたらは、またら也。斑也。あは雪のほとろと有。雪のある所、なき所あるをいふ。

ほのめかし　朝霧のほのめかしと有。髣髴の字を用ゆ。人の死して精神の髣髴たるをいふ。

反　へつかうこと　契云、隔つるなり。

へなり　天漢へなりと有。へたゝる也。

止　ときしく　季云、時なく也。又、とこしなへ也。垂仁紀不時香菓をときしくのかくのみとあり。

ともし　少き也。紀人ともし、又、みれはともしと

は、見たらぬ也。紀人ともしの季注面白しといふ也と、またとのしくとも有、

（三七オ）

乏き也。

とをよる　遠さかる也。

とをしろし　大なる事なり。

とさまかくさま　曲〻と書。是を契沖、つはら〳〵と讀へしと。

とこよ　只常也。よに義なし。又、とこしくともいふ、只常也。

とゝろ　動の字を用ゆ。とゝろによする浪と有。又、とゝとはかりも、馬足の音にいへり。馬の音のとゝともすれはとあり。

とゝなふ　事の成就するを云、今もいふ詞也。鹿の妻とゝなふと詠り。をのかこふるつまにあひたる也。

とよ　鳴るひゝき也。いな山とよに行水とあり。とよみの畧也。

ともしきに　常〻頻〻也。ともしきにみつゝ過行と有。

（三七ウ）

とこなつに　常也。なつは助語也、義なし。ふりをける雪のとこなつにけすてわたると有。

とをらふ　見んはたあり。とをく見る也。

千ちえのひとへ　千の内のひとつも也。

ちふ　手にまかんちふと有。てふと同し。といふの合せたる也。

⑤

をおそ　たはれおと有。契云、おそは東俗の語也。きたなきをいふと奥義抄にいえりと。愚案、うそといふに同し。この哥の心こひしりのたはれおと云は、うそ也といふ心也。おゝうといふ例多し。常世辺に住可物を剣刀さかこゝろからおそやこのきみ、とあり。是は浦島か常世にて箱を授りし時、これをひらくなといへるをうけかひたるに、故郷へかへりて其約誓を変し

（三八オ）

て箱をひらきたれは、老人となりて死したるをよめる哥也。おそは、実なき也。ひらくましと

ちかへる箱をひらくは実なき也。是己かこゝろからもとの凡骨になりて死したるなり。宗祇説に、そらことゝいふに同しといへり。愚説と暗にかなへり。或云、おしむのこゝろといふ一説。

おほつかな

おほゝしく　覚束なき也と旧解に有。文字は籌悒とあれは心のうちとけすうれふる義也。又、不分明貞。

おほ　凡の字也。又、疎の字をも用ゆ。よそに見なすをおほに見しと有、契沖説。

およつれか　凡そ也。

（三八ウ）

おそろ　仙云、空言也。東語也。しからはうそといふ事也。ろは助語、うそ也。をそのたはれをおもひ合すへし。

おき　末の事をいふ。おくとも有。今より末のこと也。

おゝろかに　おろそか也。おろかにそ吾は思ひしと有。

おほのひに　大きにのひやかなり。

おゝりにおゝり　春されはおゝりにおゝり。季注上りにのほり也と。鶯の高きにのほる也といへり。

おきまへて　契云、とをき深きをいふ。をくまへてとよむへしと。おきまけてともあり。おく深きこゝろ也。

おそや　心のおそき也。遅鈍をいふ。

おくかなき　又、おくかもしらすとも有。季云、そこゐもしらすと同。

（三九オ）

おやし　同し也。こゝろはおやしと有。

おつつ　現也。今のをつゝとつゝく。眼前の事をいふ。

おきろなき　深からぬを云。海の沖もふかき故なり。

おほなは　八雲云、おほかたといふこゝろ。

おもやは　見安云、よもや也。おもやは見えんと有。まつ人のよもや来らんとなり。

をろか　をろかにそ吾は思ひしと有。疎也。愚にあらす。

和

わつきもしらす　長流云、たつきと同し。契沖云、不分明。

わくらは　たま〳〵なり。

われならなくに　此なくは助字也。無の字にあらす我なりといふ言也。つきてたまへる吾ならなくにとあり。つきてたま　（三九ウ）

へる吾なりといふ哥也。

わゝけさかれる　季云、そゝけさかる也。衣のやふれてさかるなり。

加

かみさひ　季云、久しくふりたる義也。人のとしよりたる也。かみさふときかすはあらしとは、人と吾と親しき事の久しきを聞すはあらしと也。かみひとはかりも有。今日みれは木立しけしもいく代かみひそと有。只ふりたる事なり。又、岩のかんさひといへり。岩木の年ふりたる也。猶鬼神の部此ことはの注あり、合せ考ふへし。

かしこき　ものは酒にしあるらし。季云、貴むといふに同し。愚案只よきといふ心ならん。

かけのよろしく　両方をかけて宜しきなり。（四〇オ）

かすにもあらぬ　しつたまき数にもあらすとつゝく。

かへかへむたねをいむなしにして

かてぬ　ありかてぬと有。ありはてぬ也。契云、あえぬ也と、又、通す。

かよりかくより　彼よりも此よりもなり。

かしこけれとも　はゝかりなからといふ心也。

かもかくも　ともかくも也。かにもかくにもと有。

かつ〳〵　おほからぬ也。

かけまくもゆゝしき　契沖云、鄙語にかけてまうすもをそれ有といふ心といへり。信しかたし。此下の句に、いはまくもあやにかしこしとあれは意重れり。文字に掛文とあり、かけは挂也。まくはまうすなり。文字に書ことなるか。又、かけは　（四〇ウ）

書け、外に善説あるへし。

から　間也。一夜へたてしからと有。からの間の字
なるは勿論也。しかれとも、ゆへとも通ふ、一
夜間てし故と云こゝろならん。一夜へたてと云
に間の字のこゝろ有ゆへなり。
かにかく　とにかく也云云と書。
かたより　一方へかたよるなり。
かつて　嘗也。かつて木植しとあり。
かゝよう　かゝやく也。かけろふといふことし。と
もし火の影にかゝよふと有。
かへ　身わかきかへにと有。契云、わかきかいとい
ふこゝろ也。愚案、かゆへの約語也。身わかき
かゆへなり。
（四一オ）
かけて　俗言の、かまへて〳〵なり。
かれす　不欠也。おちすとも有。一日もかけす也。
ほとゝきすかれす来んかも。
かたね　固結の字を用ゆ。かたむる也。
かたつきて　一方へつく也。海かたつきてなと有。
かそけき　野邊と有。さひしきをいふ。かすかなる
也。
かくらく　隠久と書。ふるさとのかくれて見えぬ也。
かけ
秋さらはかけにもせんと我思ひしからあゐの花
を誰かつみけむ
とありて、かけの事不詳。影の字を用ゆ。季云、
景色の事かといへり。いかゝあらん。立よるか
けならんか。からあゐの花何物なるをしらす。
（四一ウ）
かる　乾也。声のかるかにきなきと有。郭公に詠り。
声のかるゝほとなけとなり。
かくな
秋山を夢人かくな忘れにし其紅葉のおもほゆら
くに
と有心詞に思ひかくな也。かけまくもかしこし
も此こゝろ也。只、かけるなり。
いもといへはなへしかしこしかすかにかけま
くほしき吾にあるかも
是も言にかけていもといひたき也。

かなしも

⑥ 神さふる岩根こきしくみ吉野のみつわけ山をみれはかなしも

かこさへ見えて　影さへなり。

（四二オ）

与 よしをもちてや　又一目見んと有。よしは因縁也。

よそ〳〵　はる〳〵とをきなり。

よろう　とりよろうと有。よろうはかこむ也。鎧をよろひといふも身をかこむ故也。

よろしなへ　宜しき也。につかはしきをいふ。

よしもなく　ゆへもなく也。よしもあらなくにとも。

よさす　任なり。人にまかする也。

よそりなく　をそれなくなり。

よしをなみ　風流をよしとめり。みことなき也。由の字ならす。又、よる所なきをもいふ。水鳥のうかみなかれてよるかたのなきをいへり。

（四二ウ）

よしゑやし　愛八師と書たれは、はしきやしともよむへし。よしといふ心也。不欲と書てよしとも讀り。又、よしえとはかりもあり。凡両義ありとみえたり。善美とほむる言なり。哥に、

たらちねの母にしらせす吾もたる心はよしえ君かまに〳〵

吾宿に花そ咲たるそをみれと心もゆかすよしえ妹かありせは

是等は皆人を指て詠り。褒ることはなるへし。このほか所〳〵に出たるは縦の心、不欲のこゝろ也。仙云、よしや也。見安云、よしやよし也。袖中抄云、あらはあれといふこゝろ也。

又、

よしえやし行時鳥今こそは声のかるかに来なきとよまめ

（四三オ）

とあり。これは古説に云、さもあらはあれなとに通す。今俗語のよひはと云こゝろ也。又、

よしえやし恋しとすれと秋風のさむくふく夜は君をしそおもふ

是等は、よし〳〵よいはもはや恋ましきとおも

へともと也。

太　たまはね　たまひね也。又、たまはれ也。賜の字也。

たみ　廻の字也。舟こきたみゆくとあり。

たつきもしらす　又、わつきとも、又、たときとも、又、たつきをしらにとも。

たゆたひ　たゝよふ也。水にかきらすためらひをることきなり。

たゝなつく　やはらかにて物にとりつく貞也。やわゝたとつゝけたり。

たに　契云、さへに通ふ有。飛鳥川あすたに、是はさへ也。本注に、一云左倍と有、しかれはあすさへといひて通するなり。

（四三ウ）

たわすれ　忘れ也。たは発語。

た　ため也。只為の字也。来ん人のたにと有。

たけそかに　契云、とりあへぬこゝろと云、信しかたし。見安云、たけき也と云。すゝむ心なるへし。

たくひ　そひならふ義也。雲にたくひてと有。

たゝはしけん　たゝゆる心也。充満也。望月のたゝはしけんと有。

たか〳〵に　仰く也。高きはあふく故なり。

たひみねく　絶間無なり。

たゝならす　季云、いたつらならすと也。分明ならす。文字は然不有と書り、誤ならん。

たしかなる　使をなしとあり。

（四四オ）

たゝしくも　唯と云こゝろ也。しくもは助字也。

たまきはる　契云、凡物のかきりあるを云。吾山のうへとあり、たゝほむる詞にも用ゆ。岩のかんさひたまきはるいく世へにけんと有所に、季云、採要云、たまき春といふこゝろなり、春をいく度かさねつらんとの心と云。いかゝあらん。山のみことに岩のふりたるをほむる詞なるへし。人のいのちの限りといふは別の説なり。

たみたる　道と有。まかりたる道也。たはみたるの畧也。人の声のなまるをもたむと云也。平声なとを去声にいへは声まかりくねるなり。

たまかつま　諸説不分明。季云、口訣也と。一説には、たまさかなり、

（四四ウ）

たまかつまの言畧して、たま〳〵となれるならん、又、たまかつまあへ島山の夕露に旅寝はすや長き此夜を、とある哥によれは、妻か夫をいふ詞とも聞ゆ。貞徳云、かむさしをいふと有。

たまのを　さぬらくは玉のをはかりと有。わつかなる事にいへり。

そ

そ　其也。其をとるを、そをとるとあり。

そこらくに　許多に也。おほきこゝろ也。

そよ　まくらもそよになけくとあり。

そくえのきはみ　又、そきえとも有。山川のそくえのきはみをとをみと有。そくえも同し。みな隔つる也。

そのへゆも　其ほとりよりも也。

（四五オ）

そきたくも　許多のこゝろ。

そら　むなしき心也。おもふそらやすからなくにけくそらやすからなくにと有。むなしき思はやすくなきなり。

そく　そこはく也。そこはとうときとあり。そこはく貴き也。

そこもあふと

つ

つら〳〵に

つきて来る　なかとつゝく。那珂は讃岐の地名、上中とつゝくゆへいふと、契沖云。

つはら〳〵　詳也と契沖云、但揖の音のつはら〳〵とあれは別義あるへし。又、つはらかにとも。季云、つまひらかと云り。

つらなへ　列ね並ふる也。舟にていへり。

（四五ウ）

つねならぬ　無常也。人とつゝけたり。人生は無常なる故なり。

つゝみなく　無恙也。又、つゝむ事なくとも有。つゝは、いましめつゝしむ也。気つかひなき故いましめつゝむへきことなし。虫の名といふは不經の説、信しかたし。是は唐の説を日本にとり用

ひたるなり。

つゝ　契云、此集始て乍の字を用ゆ。つゝになからの心有ゆへ也。故に後世乍をなからと讀といへり。つゝになからの心あるはさも有へし。乍の字につゝの心も、なからの義もなし。たちまちの義こそあれ、漢字のせんきは無用にして、つゝの義を解すへし。つゝは只つと留るまてなり。深く義をとるに及はさるへし。なからのこゝろあるは

（四六オ）

別義なり。かさぬる詞也。見つゝゆかんなとあるは、見つ〳〵行也。あさな〳〵を、あさなさなといふかことし。

奈な　勿の字なる事勿論なり。又、一向助字に用ゆ。舟を漕こなといふは、こきこよといふ心也。又、今ひとつ別のな有。こよひの雪にいさぬれなと有、いさぬれなん也。希ふ心すこし有。

なす　うつらなすと有。なすは如也。

なに名おふ　いかなる名をおへるそととかむることは也。

なからふる　長なり。

なにしかも　いかゝあらんとも也。

なへに　もみちのおち行なへにと有。たひにのこゝろ。

なつそう　吉野の川の沖になつさふと有。なかれそふ心也。

（四六ウ）

なましひ　なまは熟せぬ心也。しゆるも至極にいたれはよきに、なかは位にしゆるなり。

なくはし　くはしはほむる詞也。名のよきにと云心也。

なかきけに　長き也。けは助語。

なかる　ちりなからふるともいへり。花紅葉のちり行也。水になかるゝにあらす。

なけれかしこし

なく　なひく也。心いまそなきぬると有。風のなきぬるといふも同し。しつまる也。心のさかんになりたるかしつまるなり。

なたゝす　令名立也。立山の名のたかくきこゆるなり。

なかさゆる　長く栄る也。子孫の繁昌をいふ。

（四七オ）

なこ　あつふすまなこやか下とあり。なこは、和桑なり。衾は和なれは也。やは助字といへり。

なを〳〵に　直に也。たゝちにのこゝろ。

ならなく　ならさるにと解するよし。無の字の心をそゆるに及はす。

なまよみ　季云、甲斐のまくらことは也。上古の諺語、其義はかりかたし。

なへて　ならへて也。數ある故に数の字を用ひたり。又、すへてと用ひたる所有。押並て也。思ひしなへてとあり、すへておもふなり。

なへし　季云、軽の字の心也。しかれは慮外なからの

（四七ウ）

俗語なり。いもと打つけていふは慮外也。かろしめたるいひやうといふこゝろ也。

無

むた　ともにと云心也。共の字を用ゆ。浪のむたといふは、浪とともに也。又、しほひのむたと有。是も共の字を用ゆ。塩干のたひ、塩干とともにといふ事か。其心解しかたし。

うらさひて　心の淋しき也。

うれもそこれは　未詳。季云、いつれもそ也と。

うつたへ　うちつけとも、一向とも。長流云、ひとへにと解り。八雲云、ひとへなり、又うつくしくたへなる心とも有。

うつくしきこと　つくしてよとつゝく。いとをしむ心也。

（四八オ）

いとをしむ心をいひつくせよと也。美麗の義に非す。

うらわかみ　只わかき也。草木によすれは末葉の若き也。

うえはなさかり　契説分明ならす。

うらふれたてり　三輪の桧原とつゝく。淋しき景色を云。

うたて　このころと有。轉也。うたゝとよむ。
うへしこそ　宜也。ことはりにこそといふこゝろ。
うつなひ　現在をいふ。
うたてけに　轉異也。
うつら〳〵　つら〳〵也。熟の字。
うつなひ　只現也。山海の現然とあるをいへり。
うちしきも　うちは言ひはしむる語にて義なし。しきは、

（四八ウ）

頻也。契云、是をうつしきとも讀へし、影の字なり。けに〳〵しくまことらしきといふ心。季云、うちしきり也。愚案には、うちつけならんか。

うたかたもいひつゝもあるか
　うたかたもいひつゝもあるか吾ならは土にはおちし空にけなまし
季云、うたてといふ心に解たり。
はなれそに立るむろの木うたかたも久しき時を過にけるかも
宗祇云、かりそめ也。
鶯の来鳴山吹うたかたも君かてふれす花ちらすかも
是も、かりそめにもとの心にてよし。後撰集、思ひ川絶すなかるゝ水の泡のうたかた人にあはて消めや

（四九オ）

これは、むしろなといふこと、又、いかてなといふ詞也と定家卿の教なり。哥によりてかはるへしと有。此説いかゝあらん。又、うたかふ詞に用ひたる所あり。けたしと同し。哥を通て解をなす也。正義ありぬへし。

農
のと　のとかなり。静也。なかるゝ水ものとにかあらましとよめり。
く
くはし　名くはし吉野とあり。名のよき吉野也。麗しき也。
くれ〳〵　はる〳〵のこゝろ也。
くすはしき　あやしく珍しき也。奇を、くしとよめり。

くたけて　岩にふれくたかんと有。水のくたくるなり。こゝろにとやかくおもふをよせたる也。

やゝ　やゝをゝはと有。差多也。やゝは、すこしなり。

（四九ウ）

やさか　八尺也。長き事を云。やさかのなけきとつゝく。只、長歎なり。

やさし　世間をうしとやさしと有。季云、まつしきをいふと。愚案、はつかしきならん。

末

まさきくませ　幸多くゐませなり。

まさしに　しりてとつゝく。分明のこゝろ也。分明にまさしくしるなり。

まかひ　交はる也。乱の字をも用ゆ。もみち葉のちりのまかひとあり。

まけて　設て也。まうけ置心也。片設と書。契云、かたまけのかたは、かねて也。かねてまうけたる也。島山をきまけてと

（五〇オ）

有。季云、沖かけてと釈す。又、おきまへてとも、又、ゆうかたまけてとも有。是は設の字の所とは心かはれり。狂の字なり。俗語に、めつたにといふ心ならん。いつとてもこひぬときとはあらねともゆふかたまけてこひはすへなし。

ましめつらしき　益めつらしき也。

まかこと　狂言也。いつはりの言也。さかことのまかことも有。

またけん　わか命またけむかきりと有。全からんなり。

まねく　間なくなり。

まにまと　まに〳〵と同し、隨也。任也。まにまもおなし。

まねみ　あはぬ日まねみと有。あはぬ日おほき也。隔るなり。

（五〇ウ）

まなを　真直也。こゝろにてよめり。

まさか　たしかと云心也。君かまさかに人のつけつる、とあり。是は、誠の字也。契云、さしあたりたるところをまさかと有。又、今のまさかと

も有。眼前の境界をいふ。

まよひ　白たへの袖をまとひぬと有。やふれたる也。

肩のまよひとあるとおなし。

け

けなかくなりぬ　君か行けなかくなりぬと有。けは

発語也。ひさしくなりぬといふ心か。

けたし　ほとゝきすけたしや鳴しと有。疑ひの詞な

り、又、けたしくもと有、こゝろおなし。

けぬかに　消るかになり。

（五一オ）

けかしき　けからはしき也。汚穢の家と卑下してい

ふなり。

けやに　こゝろもけやにと有。心の消ることくなり。

けに　いやひにけには思ひますとも。契云、まさる

と云心也。殊異勝等の字を用ゆる也。愚案には、

日ことにと云心也。毎日なり。毎の字に、いつ

かたも通す。又、まさると云心にて通しかたき

哥あり。馬の声も心あるかも常にけになく、と

有。常従異鳴と書り。常にかはりて声の聞ゆる

也。しかれは、こゝのけの詞は、かはりたる心

也。又、この旅のけに妻離るへしやといへるは、

故に、といふかことし。今信濃の人は、故をけ

にといふ。

不

ふたゆく　両色也。両様をいふ。

（五一ウ）

ふすさ　ふさ也。多き心也。今の俗語に、ふくさに

といひ、ふつさりといふ。

己

こと　ことは、異事也。

こゝろさまみし　さまみしは、寒也。心の淋しきを

いふ。

こちたみ　おほき也。人言をしけみこちたみと有。

愚案に、人言のおほきに痛み苦しむなり。

こゝ　おもへはとつゝく、又、こゝはかしこきとも

つゝく。多きなり。又、こゝた、こきたく、こ

きはく、皆相同し。

こちたく　こと〳〵しくぎやうさんなるこゝろ。

こちこち　をちこち也。遠近なり。木の枝のをちこ

ちなり。

こそ　雨なふりこそと有。契云、こそは乞也。ねか

ふことは也。

（五二オ）

こふ雨ふるななり。

ことさらに　故の字なり。わさ〳〵のこゝろ也。

ことにしありけり　言にて有けりと也。名のみにて其実なしとなり。忘草の名の甲斐なしと也。

これ　此なり。これの水島と有。この水島とさす言也。

こほれなは　壊の字を用。今もやふることを、こはすといふ。

こち〳〵　盡也。悉なり。こと〳〵の花の盛りとあり。

ことにあらは　如くあらはなり。

こと　ことふらは袖さへぬれてと有。殊の字、特の字なり。すくれてかくへつに雪ふらはなり。

ことしあらは　大事あらは也。愚案、ことは畧也。特也。事の

（五二ウ）

字のみにて大事とは見かたし。

こめ　橘を花こめに玉にぬくと有。花とともに也。中に篭て也。混してなり。

こゆ　自此也。ほとゝきすこゆなくとあり。

こゝろたらいに　心に満足する也。

こりしく　こきしくとも有。岩根こりしくなり。こきは、凝集也。岩の多きなり。

江

え　よく也。善也。恋といふはえも名付たりと有。能も名つけたり也。又、愚案には、得の字なら ん。名付得たりといふこゝろか。又、故をえとはかりも云也。おもふえにあふものならはと有。

（五三オ）

えら〳〵に　仕奉るとつゝけたり。季云、ゆら〳〵也。ゆたかなる也。

安

あちさはふ　まことゝつゝく。あちは、むまき事、よきこと也。さはふは、おほき也。よき事の集りたる也。ことゝはぬ木すらあちさひの、此あちさひと同しからん。

あぢこりあやに

あれせんや　荒廃する也。

あやに　かなしみと有。あやしきほと悲しき也。
あに　豈也。なんそなり。
あえて　敢也。あえてこき出んと有。舟をきつかひなくつかと漕出る也。季云、あえきての説非なり。
あそゝに　契云、うす〳〵といはんことし。推量する言也と。

（五三ウ）

あらひなゆきそ　あらは、ちる也。ちり行なと也。是は、池の鳥をあはれみていふ也。又、家のあれゆくなとの説も有。初説は、契沖也。
あなたつ〳〵し　痛をあなと讀り。あしたつといふを受たり。
あらかしめ　豫也。かねてよりの心也。かねてしりせはとつゝく。
あや　ほむることはなり。
あしひなる　栄へし君とあり。
ありさりて　かり〳〵てなり。後の事をいはんとての言なり。事すきてなり。
あたかも　恰なり。

（五四オ）

あたら〳〵　新に〳〵なり。
あまたゝひ　数回なり。
ありのこと〳〵　ありたけこと〳〵くといふこゝろ。
ありかほし　あらまほしき也。みまほしきを、見かほしといふたくひなり。
あえぬかに　あえは、交也。不交平也。かは、うたかふことは。仙云、吾にあへて花さきにけりと也。
季云、似也。時に似合たる花といへり。皆非なり。
おふるたち花玉にぬく五月をちかみあへぬかに花さきにけり、しかれは卯月の末ころの哥と見えたり。畢竟五月をまちあへぬ様に花咲たりとなり。交の

（五四ウ）

字の義、しかるへし。

左

さやり　礙りあるなり。さやれるともあり。

さきく　契云、日本紀に、無恙とも平安とも書。幸の字も同し。こゝは辛埼か昔のことくある故、幸といふ也。又、さくともあり。

さや　すこき心也。すゝきあけたるといはんかことし。又、さやにもみえすとあり。さやか也。分明也。

さは　多き也。鶴さはに鳴と有。

さかこと　逆言也。すちなき事なり。

さふしえ　さひしきなり。

さにつらふ　紐とつゝく。季云、紐をほむる詞也と。

（五五オ）

さかなき　いふことのさかなき国とあり。

さはらひ　さゝはる也。礙なり。

さふしけんかも　さひしからん也。寂寥也。

さひ　つゝおらんと有。淋しくおるなり。

さね　実になり。

さ　さわたる月と有。雲間の月のはやく見ゆる故也。早稲早蕨なと、はやきを、さと云。元来は、矢を、さといふ。はやきものをみな、さといふへし。

さやけき　みのさやけきと有。目に見ていさきよき也。

さきはふ　幸也。ことたまのさきはふ国と有。瑞祥ありて、幸おほきくになり。

（五五ウ）

起

さしなみし　さし並ふなり。

きはみ　きはまり也。限り也。夜のあくるきはみと有。

きふ　年はきふともと有。年は来り歴るとも也。

きほふ　あらそひくらふる也。雪にきほひて梅の花さく。

由

ゆめ　勤の字を用たり。又、ゆめよとも有。よは助字なり。慎の字、努の字を皆ゆめと讀。つとめての心也。

ゆゝしみ　いまはしき也。忌むこゝろなり。

ゆすり　うこかすとつゝく。又、礒もとゆすり立浪とも。

ゆな〳〵は

ゆかしき　君を今日みつるとつゝく。契云、覚束なき也。又、雨こもり心ゆかしみと有。欝悒の字を用ゆ。

（五六オ）

こゝろのむすほふれたる也。こゝは君を思ふ故也。

ゆめのわた　長流云、わたは間也。すこしの間と云こゝろ。季云、夢のわたり也。わたりと云は、只夢の事なり、下を畧す。

ゆた　寛の字なり。ゆたか也。ゆたにたゆたとも有。是は、猶豫不定と書り。ためらふ也。又、ゆくらかにとも。ゆるやかなるなり。又、大舟のゆくら〳〵とも。

美

みつ〳〵し　うるはしきなり。

みな　人みなはと有。皆人はといふへし。又、ひとも寝のとも有。皆人のといふこゝろ。

みなうら　皆悉也。

（五六ウ）

之

みやひたる　都ひたる也。みやひやかも同し。都の風めくこゝろ。又、只うつくしき事にも用ゆ。梅をみやひたる花ともいへり。

しつめ　日の本のやまとの国のしつめと有。冨士山を、日本国の鎮とする也。鎮の義は、爾雅に出たり。

しつく　沈む也。水にしつく石と有。

しみさひたてり　季云、しけき義也。

しかはた　契云、しかは其か也。はたは初也。吾にかきむけとつゝく。鮎をとりたらは其初とりたるをわれにをくれとなり。

しとゝ　ぬれてと有。しのくとも有。今云、しと〳〵の心也。

（五七オ）

しく〳〵に　しきりに也。しき〳〵とも。

したえる　しなへる也。

しなふ　しなやかなる也。真木の葉のしなふ、又、春山のしなふともあり。

しゝに　繁の字也。又、しみゝともあり。同心也。

しめさん　見せん也。濱つとこはゝ何をしめさんと有。

しきたへ　家とつゝく。吾ものとするこゝろ也。

しかすかに　さすか也。愚案に、さすかと異也。しらす貝の言の省ける也。才十に出たるは、分明にしらす貝にと聞ゆ。

しく〳〵　かさなる心也。雲のしく〳〵と有。しきりの心にあらす。

（五七ウ）

しのに　心もしのにいにしへ思ふと有。しのはしけき也。又、心をしのとはかりにて思ふを畧せり。もとより露のしけきによせたり。又、しぬゝに濡てとも。季云、しのは、常にといふこゝろと也。

しきて　見んと有。かさねて也。紅葉をかさねて来てみんとなり。

しかとあらぬ　然不有の三字也。旧点は、たゝならぬ也。契云、しかとあらぬ鬚かきなてゝと有を引て釈せり、是なり。田の稲のすくなきをいへり。

しなひ　たはみたる也。萎の字を用ゆ。やはらかなるによりたはみしはむなり。

（五八オ）

しみら　ひるはしめらに夜はすからにと有。しめらとも有。終の字也。けふもしめらにと有。此しめらを、季云、静むといへり。

しるしなし　俗に云、其甲斐なし也。

しかのみに　如是に也。

しは〳〵しふ　舟のしは〳〵しふと有。しふり行ぬ也。

しのき　菅の葉のしのきふる雪と有。凡ものゝ上に出たるを云。雪ふりて葉の上に有故也。人を凌くも同し。俗に、かまはぬといふ心。又、槇の葉しのき降雪と有。祇云、なひく心也。又、秋萩しのきさほ鹿なくと有は、押わけ行て鳴也。

（五八ウ）

しえや　契云、よしえやしの上下畧する詞と云、信しかたし。こひしきしえやとも有。是は恋しき

と句をきりて、よしやといふ也。又説、こひしきしと句をきり、えやといふ也。えやと書も、よしや也。よしをえといふ例もありといへり。兼てより人言しけくかくしあらはしえや吾せこをきもいかゝあらもといへり。又、

春山のつゝしの花のにくからぬ君にはしえやよりぬともよし

此季説、君にあひなれんまてはえなるまし、よしやそはへよりてなりともよしといふ心也、といへり。又、しなんやわかせと有。此こゝろと見るへし。人言おほ

（五九オ）

けれはこの事しひえんやいかゝあらんといひかくるか。

比　ひて　ひちて也。浪にぬれる也。

ひしとなるまて　ひしは物のなる音也。なるは、鳴る也。是は、床のみし〳〵と音のするなり。

ひたてり　常光也。常に色の赤くてる也。

毛　もなくもあらん　喪の字也。すへて禍をいふ。

もか　花にもかと有。花にも成とねかふことはなり。

もかなの、なを畧する也。

もゝくさ　百種也。世の萬事なり。

もゝつたふ　いはれとつゝく。磐余也。いを五十として、百よりつたひ来る也と。

（五九ウ）

もとな　季云、よしな也。契云、よしなき也。説〻まち〳〵也。よしなきの釈是也。しかし愚案には、よしなきよりは、せんなきといふかいつ方にても通するか。又、はからすといふことき時も有。此ことはのある哥皆々書出せり。つゐて考ふへし。又、もとなしとも。

あひみすは恋さらましを妹を見てもとなかくのみ恋はいかゝせん

吾宿の夕陰草の白露のけぬかにもとなおもほゆるかも

相思はぬ人をやもとな白妙の袖ひつまてにねのみしなくも

かけろふの朝にみえて別なはもとなや恋んあふ

時までは
朝戸明て物思ふ時に白露の置る秋萩見えつゝもとな
せんなきにて能叶へり。萩は見ことに心をなくさむる

（六〇オ）

物なれとも、物思ひ有吾なれはそれを見てもなくさまねは、せんなきことなり。
春されはつまをもとむと鶯の木すえ傳ひを鳴つゝもとな
おもひつゝぬれはかもとなぬは玉の一夜もおちす夢にし見ゆる
もくもあらん時も鳴なん日くらしの物もふ時に鳴つゝもとな
心なき秋の月夜の物思ふといのねられぬにてりつゝもとな
又、もとなしは、
かく斗もとなし恋は古郷に此月ころもありかてましを
又、もとなくは、
いはほろのそひのわか松限りとや君か来まさぬうらもとなくも
見安云、心もとなくと云義也。但もとなといへる詞とは別ならん。

（六〇ウ）

寸　す　為の字也。旅やとりせす。このすは、すみてよむへし。旅やとりをするなり。
すゝしきを
すなはち　則也。時鳥鳴しすなはちと有。
すさむ　あつさゆみさきすさひたるつき草とあり。契云、手すさひ、くちすさひの類也。花なれはさくをそのわさとする也と。愚案是に限らす荒の字の心に用るすさひ有へし。今のすかるといふ俗語の如し。花のさきすかる也。梓弓さきとつゝくは愚案には、矢を此集に、さといへり。弓矢とつゝくこゝろか。朝露にさきすさひたるとも有。季云、花のさききはまり

（六一オ）

たる心といへり。

すてに　既也。すてに心は君によると有。又、わか名はすてに立田山ともあり。

すむやけく　速也。すみやけくなり。

すかなく　すきまなく也。たえまなき也。常にの心なり。

すたく　鳥獣部に出たり。

すけき　玉簾のこすのすけきと有。仙云、すけきはすこき也。静なる心と有。季云、顕昭、俊頼哥に、きけきとよみてしけき心とす。愚案すき也。けは助字也。うきをうけくといふ類なり。小簾のすきまより来れといふなり。

（六一ウ）

（『萬葉集詁』下、終わり）

注

①～⑥の六箇所に、それぞれ次のような朱の書きこみがある。

①　額ヲ付也　（六オ）

②　心もなく也。　（一六オ）

③　綱引　（二五オ）

④　相釪　（二五オ）

⑤　○云

おそは鈍也心はやからぬ

といふ也

たはれをは風流士也

戯男よりは右の方よし　（三八オ）

⑥　○○（コモリ）　○こもり明神有　（四二オ）

上部に書きこみのある⑤⑥については、一部切断されていて解読出来ない箇所（○印）がある。

（了）

付　記　本稿は、「五井蘭洲『萬葉集詁』上（翻刻）」（『相愛国文』第六号・平成五年三月）・「五井蘭洲『萬葉集詁』中（翻刻）」（『相愛国文』第七号・平成六年三月）の続稿である。

今般、東京国立博物館資料館所蔵の『萬葉集詁』を閲覧する機会を得た。東京国立博物館資料館本は、袋綴本・縦二七糎、横一九・三糎の五冊本で

ある。題簽にはそれぞれ『萬葉集話』とあり、「附言」を付す第一冊目（仁）五一丁・第二冊目（義）二〇丁・第三冊目（禮）三一丁・第四冊目（智）四二丁・第五冊目（信）二八丁から成っている。本稿が底本とした吉永本と、ほぼ同様の語句を注するが、吉永本・無窮会神習文庫本ともども語彙の取りあげ順も、解説の仕方も同一ではない。三本の検討を引き続いての課題としたい。

ご高配を賜わった東京国立博物館資料館の方々に、御礼申しあげます。